

# 日本文化部会

## 【概要】

董

航\*

### はじめに

第13回国際日文学コンソーシアム日本文化部会は、2018年12月11日（火曜日）、お茶の水女子大学文教育学部1号館1階第1会議室において開催された。「いのち・自然・社会」というテーマのもと、5人の発表者による研究報告が行われた。以下、各報告の内容と質疑応答について概要をまとめる。

### 1. 馬場貴和子（本学院生）「近世箱館の都市社会」

近世箱館の都市社会の一端として、箱館の町や市内中小商人など町人の動向を調べる報告であった。蝦夷地は近世を通して、各地の産物を中心とする交易が繁栄し大きく発展していった。従来旅人は蝦夷地滞在のために旅人役銭を支払わなくてはならなかったが、それが撤廃され多くの旅人が市内に流入したことで、これまで通りに社会生活を送ろうとする市在の箱館町人と既存の社会生活にとらわれない旅人との対立が見られると述べた。

質疑応答では、旅人役銭の支払いが撤廃された背景が議論された。また、箱館大工職人をめぐって、江戸時代における大工職の社会的地位はどのようなものであったのか、宮大工と家大工とを分けて考えるべきというコメントなどもあった。

### 2. 鈴木聖子（パリ・ディドロ大学教員）「言葉と歌と息のあいだにいのちを描く：小沢昭一『日本の放浪芸』における声の文化」

俳優・小沢昭一が日本各地を歩いて録音した芸能が収められているLPレコード集『ドキュメント・日本の放浪芸』に関する考察であった。『日本の放浪芸』には、警女唄、節談説教など実況録音によるインタビューや小沢自身の語りが含まれた。この発信のための「ドキュメント」作品は、言葉と歌と息のあいだに文学でも音楽でもなく、定めては描くことのできない人のいのちの形を描いたものであり、なお、高度経済成長とテレビの普及という時代背景の下、人のいのちや生活と寄り添う声の文化が消失していくということに対する、小沢の声による反対声明でもあったと述べた。

質疑応答では、声明という源泉から節談説教、近世に成立した義太夫節など様々な語りが発生し広がる中で、1970年代の小沢の仕事をどのように評価できるのかについて議論された。

### 3. 保田那々子（本学院生）「童装束としての汗衫の成立」

平安朝の服飾の唐様の摂取とその後の和様化の中で、童装束化する前の汗衫（カンサン）がどのように童女の汗衫（カザミ）へ変化していったかについての考察であった。10世紀半ばには大嘗会の御禊に供奉する下仕の女性に着用されていたカンサンは、平安時代に入るに伴い、女性の服飾

\*お茶の水女子大学大学院生

として用いられる段階を経て童装束化し、童女の正装であるカザミへと変化を遂げたと述べた。童装束化する要因として、平安中期に女性の正装として唐衣裳装束が成立したこと、従者から幼少者へというワラワの意味の転換が服飾にも影響を与えたことがあると考えられる。

質疑応答では、『源氏物語』において描写されたカンサンの下に着る帋をどう理解すればよいのかについて議論された。また、中国で何千年も下着として着用されてきたカンサンがなぜ童女の上着に変容を遂げたのかという問題意識が面白いというコメントもあった。

#### 4. David Labus (チェコ共和国・カレル大学 教員)「幕末時代における技術と公論—横井小楠を中心に(命・自然・社会)」

朱子学的な価値観を念頭におきながら、「技術」の捉え方の変容を枠に、横井小楠を中心とする幕末の知識人における周辺世界の認知モデルを考察した。後期水戸学において「攘夷」の語がはじめて用いられ、ペリー来航が契機となり、日本が開国を求められ、開国論か攘夷論かが思想界の面で議論された。日本国内での技術の利用を合わせて検討する場合、技術は評価の基準として、富国強兵の方針に沿った物理的な技術のみならず、思想そのものも「師に習う」から「理に習う」というモデル転換の技術的なアプローチも考えられる。

質疑応答では、幕末時代から19世紀にかけての思想研究においては、最近、富国強兵の代わりに富国安民という言葉が用いられるようになっていくという背景の下で、儒学に沿う技術と儒学に沿わない技術をどのように捉えたらよいのかについて議論された。

#### 5. 宋金文 (北京外国語大学北京日本学研究中心 教員)「災害復興過程におけるソーシャルキャピタル(=SC)の役割」

ソーシャルキャピタルとは「人々が何らかの行為を行うためにアクセスし活用する社会ネットワークに埋め込まれた資源(ナン・リン)」である。本報告は、災害復興過程でどのような信頼やネットワーク、規範、いわばソーシャルキャピタルがどのようにして人々に利益をもたらしたのかを発生論と機能論的に検証することが目的であった。2008年、中国中西部の四川省で起きた大規模な地震の災害復興過程の事例を通して、前述した発生論と機能論という両者の結合・分離が被災地の早期復興の成否につながる重要な要件であることを説明した。

質疑応答では、人々の中の協調的な行動を促す信頼関係があったからこそ、事例にあったような災害復興が出来た一方、このような信頼関係がない場合はどうなるのかについて議論された。

#### おわりに

以上、日本文化部会における研究報告と質疑応答の概要をまとめた。本コンソーシアムでは、「いのち・自然・社会」というテーマを軸として、古代・近世・近代・現代まで幅広い時代を取り扱い、それぞれ衣装・都市社会・音声・技術・ソーシャルキャピタルに着目し、多様性あふれる論考がなされた。今回のコンソーシアムを通じて、自然の一環としてのいのちの尊さを学び、社会の営みを築いていくことが人間の本来あるべき姿であると改めて実感させられた。